

私は昭和17年（1942）年4月に現役兵として宇都宮東部44部隊第3中隊に入隊しました。見た目はご覧のように貧弱なんで、丙種かと思いきや甲種でしたね。この部隊は輜重兵（しちょうへい）でして、兵站を主に担当するんです。水食料・武器弾薬・各種資材など様々な物資を第一線部隊に輸送するのが任務で、私は自動車中隊でした。輜重兵はたいがい隊列の一番後方でしたから、3年ちよつとニューギニアにいましたが、敵と面と向かつて遭ったことはなかったんです。最前列だった歩兵隊の戦友はほとんど帰って来られませんでしたがね。宇都宮の私の部隊も、50人ばかりのうち、帰って来られたのは7、8人です。それだけ消耗が激しかったんですが、弾に当たって死ぬより、食べ物がないね、餓死や衰弱して病死する人が多かった。マリアアやら天狗熱やらね、私も一通りやりましたが、葉なんかもなくてね、軍医さんはヤシの汁を点滴したりしてましたよ。

私は半年ばかりの訓練の後、昭和17年11月23日に宇品港を輸送船に乗って出発しました。行き先は知らされないままで、冬服を着ていたんですがね、出発して2日目に夏服が支給されたんで、こりゃ南方に行くんだなと思えました。3日目に班長が「我々はこれからニューブリテン島のラバウルに向かう」と言っただけです。同僚が世界地図で場所を教えしてくれましてね、オーストラリアのすぐそばで、ずいぶん遠くまで行くんだなあと思えました。我々が乗った輸送船は『秋津丸』といっ

て、船員さんによると当時の最新式の船で、両翼が500mはあろうかという大きさでした。機関砲や高射砲も設置された航空母艦みたいなやつでね、これ1隻に駆逐艦が護衛してくれていました。普通の日本の輸送船は12〜13ノットのスピードだけど、これは21ノットでると、乗員が自慢していましたよ。

1週間ほどかかったかなあ、確か12月2日にニューブリテン島のラバウルに上陸しました。1週間ばかり荷降ろしのために停泊してんですが、2日目に敵機の攻撃がありましたね、いよいよ戦地に来たんだなと覚悟しました。しかし当時はまだ日本軍の軍艦も輸送船もたくさん入ってきていて、あんまり戦況が悪いという気はしませんでした。翌年2月ごろになると、だんだん空襲が激しくなってきました。並木が全部焼かれたりしました。ちよつどその頃、ガダルカナル島の敗北で撤退作戦が始まり、負傷したり病気になった兵隊さんをラバウルの港まで迎えに行き、野戦病院に運ぶ任務に就きました。栈橋に行つて降りてくる人たちを見て驚きましたね。もう裸同然なんです。やせ細った体に米が入っていた麻袋を巻きつけ、荒縄で結わえただけのかっこうで、みな杖をついてフラフラ歩くのがやつとの状態だった。トラックの荷台に一人では登れないんです。2、3人でようやくと押し上げてね、野戦病院に運びました。多少元気の残っていた兵隊さんにガダルカナル島の様子を尋ねると、圧倒的な戦力の差があり、我々に勝ち目はないと。日本軍は食料の補給すら出来ず、野草やカタツムリを食べ、生きていくこと自体が難しい状況だったと言っていました。